

団塊世代と歌謡曲(1)

富貴島 明

はじめに

歌謡曲は、時代の合わせ鏡である。その時代の経済、政治、社会的動向、文化などの影響により、歌謡曲がつくられ、それらと最もマッチした歌謡曲がヒットする。歌謡曲は、時代から生まれる。逆に歌謡曲が時代とその時代をつくる人に影響を与えることもある。歌謡曲は、その歌を聴き、口ずさむ人の人生とふれあい、重なり合うことで、その人を慰め、元気づけ、行動づけ、新たなる時代をつくりだす。歌謡曲は、時代と人生をつくる。「歌は世につれ、世は歌につれ」という。本稿の目的は、団塊世代の特徴を、かれらが赤ん坊の頃から聴き、子どもの頃から好んだ歌謡曲を参考にして検証していくことである。団塊世代は、厳密には、1947（昭和22）年から1949（昭和24）年生まれの800万人を指す。広く、昭和20年代生まれの2,000万人を指すこともある。本稿では団塊世代の代表として、1947（昭和22）年生まれ的人物をあげ、その人の時代と人生を、歌謡曲と関連させながら明らかにしていき、団塊世代の特徴を検証する。

まず第1節では、1947（昭和22）年に生まれた団塊世代の0歳から18歳までの、その年ごとの政治や経済、社会的動向、文化的傾向を簡単に指摘し、その年に流行し、ヒットした歌謡曲の題名をあげていく。赤ん坊の頃でも、親が口ずさんでいた歌謡曲、ラジオから流れていた歌謡曲を聴いていたはずである。「三つ子の魂百まで」ということわざのように、小さい頃の印象が、育つにつれ大きくなり、性格や行動に影響を与える。そしてかれらが中学生の頃になると、団塊世代としての特徴が形成されてくる。かれらが好む歌謡曲が団塊世代の特徴に合ってくる。団塊世代の中学生から高校生の頃にデビューした橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の「御三家」の歌謡曲を特に詳しく分析することで、団塊世代の特徴を検証することにする。この御三家が、歌謡界の実力者として、多くの歌をうたい、団塊世代の人びとに影響を与えていく。もちろん団塊世代の思考と行動に影響を与えた歌手は、この3人だけでない。必要に応じて他の歌手の歌謡曲も分析される。

第2節では、団塊世代の7つの特徴が検証される。

第3節では、第1節で題名だけあげておいた歌謡曲の歌詞を分析し、団塊世代の特徴といかに

合致するかをみていく。

第4節で、本稿をまとめよう。

1 時代の概観・検証

1947(昭和22)年は、0歳。戦後の混乱が続く。食料の配給は、遅れたり、配給されなかったりした。買い出しに明け暮れて、やっと食べ物を得られるような日々のなかで、団塊世代の赤ん坊が誕生する。極東軍事裁判が始まり、過去の清算がおこなわれようとしている。GHQによる改革は進む。学校教育法が施行され、6・3制が発足した。財閥解体が指令された。戦後の新しい日本の建設が始まっている。児童福祉法が制定された。前年度には、明るい歌声の並木路子の『りんごの唄』が、明日への希望をうたいあげた。本年度は、菊池章子の『星の流れに』の暗い恨み節に、日々のやるせなさを重ね合わせていた。

1948(昭和23)年は、1歳。昭和電工疑獄で、芦田内閣が総辞職する。帝銀事件が発生。政治と社会の混乱は続く。食料と住宅の問題はまだ解決されない。これらの混乱を吹き飛ばすように、笠置シズ子『東京ブギウギ』を、派手なパフォーマンスで歌い、踊った。豊かな国アメリカへの羨望を、岡晴夫が『憧れのハワイ航路』で歌った。ハワイは無理でも温泉を楽しみたいという欲望を、近江俊郎が『湯の町エレジー』で、表現した。40万枚を売りあげた。

1949(昭和24)年は、2歳。ドッジ・ラインで、企業倒産が増加し、失業者が激増した。国鉄では、954,312人が人員整理された。景気が落ち込むなか、若く明るい歌声で日本人を魅了したのが、藤山一郎と奈良光枝の『青い山脈』である。国民的歌手となる美空ひばりの、初ヒット曲は、『悲しき口笛』であった。

1950(昭和25)年は、3歳。6月に朝鮮戦争が始まることで、日本経済は特需景気に沸く。米以外のパンやうどんなどの統制も撤廃されるようになる。戦後の混乱から立ち直り、自立への道を歩み始める。動物園の開園ラッシュの年でもあった。高知市、甲子園、浜松市などで開園された。歌謡曲では、洋モノが大流行した。『ボタンとリボン』、『ビギン・ザ・ビギン』などのポピュラー・ソングの他にもジャズやラテン音楽が流行した。

1951(昭和26)年は、4歳。サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約が調印された。翌年に占領から解放される。日本の主権が取り戻されようとしている。子供の人権を認める児童憲章が制定された。本年から1954(昭和29)年まで、パルプ、デパート、パチンコの「三パ」景気が続く。歌謡界と映画界では、13歳の美空ひばり旋風がふきまくる。『私は街の子』、『あの丘越えて』、『ひばりの花売り娘』など、ひばりの歌声と映像に、日本人が熱狂した。1月3日に、NHKの第1回紅白歌合戦が放送された。

1952(昭和27)年は、5歳。GHQが廃止され、日本は独立した。繊維・鉄鋼・自動車産業の近代化が進む。設備投資が増大し、所得が増加し、消費景気がおきる。ヘルシンキでの第15回オリンピックに参加した。黒澤明監督の『羅生門』が、アカデミー賞優秀外国映画賞を受賞した。美空ひばりの『リンゴ追分』が、70万枚の売り上げ。江利チエミの歌う『テネシーワルツ』は、英語と日本語の2カ国語で歌われ、20万枚も売りあげた。アメリカ讃美の根深さを伺わず。神楽坂はん子の『ゲイシャワルツ』と『こんな私じゃなかったに』は、歌詞が猥褻だとして、発売直後に放送禁止になる。退廃的歌謡曲、健全なひばりの唄、アメリカ讃美のチエミの唄が、響いていた。

1953(昭和28)年は、6歳。3月に吉田茂首相の「バカヤロー」解散とスターリン暴落で、政治的・経済的に混乱した。設備投資が拡大し、輸入が伸び、外貨準備が高まり、国際収支の天井が覆い被さり、9月から経済の引き締めがきびしくなる。翌年10月まで景気は後退する。電化元年の年である。電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビの三種の神器などが発売された。憧れの対象であった豊かなアメリカの生活の模倣が、電化製品の分野で始まろうとしている。クリスチャン・ディオールがモデルとともに来日し、ショーを開く。ディオール旋風が吹き荒れる。銭湯の女湯を空っぽにしたほど人気のラジオ・ドラマ『君の名は』が映画化され、「真知子巻き」がブームになる。織井茂子の『君の名は』もヒットした。雪村いずみの『想い出のワルツ』と『はるかなる山の呼び声』は大ヒットした。美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみの「三人娘時代」の始まりである。

1954(昭和29)年は、7歳で、小学1年生。小学校の新生が、前年より100万人増加した。11月に、1958(昭和33)年6月まで続く神武景気が始まる。竹内つなよしの『赤胴鈴之助』の漫画人気が高まる。1956(昭和31)年にラジオ・ドラマ化され、その翌年に映画化される。春日八郎の『お富さん』が80万枚売りあげる。三人娘が歌謡界を席卷した。美空ひばりは『ひばりのマドロスさん』、『伊豆の踊子』、江利チエミは『ウスクダラ』、雪村いずみは『青いカナリヤ』、『オー・マイ・パパ』などをそれぞれヒットさせた。歌謡界では、戦後派の歌手が増え、戦前・戦中派の歌手が影をひそめていく。

1955(昭和30)年は、8歳で小学2年生。この年は、神武景気により戦後経済最良の年といわれた。森永砒素ミルク事件がおきた。女性労働者が1,700万人に達した。合計特殊出生率が3以上から一挙に2近くに下がった。泣き節の天才少女歌手・島倉千代子が『この世の花』でデビューした。40万枚を売りあげた。三人娘は、映画『ジャンケン娘』で共演し、それぞれの主題歌をヒットさせる。春日八郎の『別れの一本杉』では、東京に出稼ぎに行った男が、故郷に残した恋人を思って、こらえきれずに泣く状況が歌われている。出稼ぎが増えている。

1956(昭和31)年は、9歳で小学3年生。国連に加盟が認められた。『経済白書』に「もはや

戦後ではない」と記された年である。民間設備投資の増加と三種の神器の登場による高度成長時代の幕開けである。同時に高度成長のひずみである公害として水俣病が公になる。新教育委員会法が可決された。校長が教員の管理者となり、文部省と日教組の争議が多発する。集団就職列車が運行される。1973（昭和48）年まで続く。本年は、団塊世代の前の若者文化、つまりプレ団塊世代文化が興隆した年として記念すべき年である。プレ団塊世代の若者が、大人でも子どもでもない若者の存在を、行動で表明したのである。前年度に芥川賞を獲得した、石原慎太郎の『太陽の季節』が映画化されたことが始まりである。男は慎太郎刈りとアロハシャツ、女はルリ子カットとショートパンツで、街をねりあるいた。その2ヶ月後には、石原裕次郎が主演し、その主題歌を歌った『狂った果実』がそれぞれヒットし、裕次郎が若者文化の象徴となる。若者は、裕次郎のように、ためらいもなく自分の感性のままに主体的に行動しようとした。10代後半が「青春の終わり」でなく、「やっと自分の思いを表現できる年代」になった。若者が、「感性のままに生きたい」というメッセージを社会に向けて発信したのである。裕次郎は歌謡曲でも、「叫ぶぜ」とか「叩きゃ」、「吹きやがれ」という、街のアウトルーたちの心の叫びを巧みに歌にとり入れ、若者には支持された。裕次郎の映画も歌謡曲も、若者に受け入れられた。前年の砂川基地闘争で戦った、硬派の若者の多くが、ベストセラーの『太陽の季節』の本をもっていた。だが大人は、理解できずに、不良と非難した。映画は上映禁止になった。ませた団塊世代の子どもたちは、10歳ぐらい年上のお兄さんやお姉さんたちが築こうとしている若者文化を、憧れを抱きながらみていた。大人の歌謡曲は、出稼ぎの悲しみを歌った三橋美智也の『リンゴ村から』が大当たりをした。

1957（昭和32）年は、9歳で小学4年生。この年の下期から翌年の下期まで「なべ底不況」に入る。人気絶頂の美空ひばりが、人気をねたむ女性に塩酸をかけられる。同じような事件が多発する。三波春夫の『チャンチキおけさ』と島倉千代子の『東京だよおっ母さん』がヒットする。都会に出稼ぎに出た労働者が、田舎を懐かしがり、田舎に残した母親を思う心情を歌っている。高度成長に翻弄される大人の心情である。石原裕次郎は、『俺は待ってるぜ』と『錆びたナイフ』で主演を演じ、それらの主題歌もうたった。人気爆発し、これから大スターの道を進むことになる。

1958（昭和33）年は、10歳で小学5年生。6月から岩戸景気が始まる。聖徳太子の図柄の1万円札が登場した。「スバル360」が発売になる。マイカー時代の始まりの象徴である。だが若者はまだモペット・ブームの時代である。原付に乗ったカミナリ族や暴走族が横行する。若者が自由にお金を使えるほど、社会が豊かになりつつある。そして若者文化がさらに興隆する。ロカビリーが大流行であった。若者は、平尾昌章（後の昌晃）の『ダイアナ』や小坂一也の『監獄ロック』に熱中する。ロカビリー3人男といわれていたのが平尾昌章、ミッキー・カーチスと山下敬

二郎であった。軟派の若者のファッションは、リーゼントにウエスタン・シャツとマンボ・ズボン。どちらかという硬派の若者は、慎太郎刈りと革ジャンで、バイクを乗り回していた。大人は、「魅惑の低音」フランク永井の『有楽町で逢いましょう』の、都会の恋人たちの甘いムードの世界に酔いしれていた。

1959（昭和34）年は、11歳で小学6年生。岩戸景気が続く。4月に、皇太子明仁様と正田美智子様のご結婚式パレードがテレビ放映されることで、テレビの普及率が急増した。前年度10.4%、本年度23.6%、次年度44.7%である。小学校高学年と中学生の5人に1人が、1日5時間以上テレビを見ており、このような「テレビっ子」が問題になった。3月から放送された『スター千一夜』、12月から放送された『世界飛び歩き』（後に『兼高かおる・世界の旅』と改称）は、視聴率が高く、長寿番組となる。連続テレビ・ドラマ『ママちょっと来て』は、本格的ホーム・ドラマのはしりである。大村昆主演の『番頭はんと丁稚どん』が、大阪人情喜劇で人気があった。日本レコード大賞の第1回受賞曲は、水原弘の『黒い花びら』であった。歌唱賞と作曲賞は、フランク永井の『夜霧に消えたチョコ』であった。女性グループが歌謡界をにぎわした。ザ・ピーナッツの『可愛い花』と『心の窓に灯を』、スリーキャッツの『黄色いサクランボ』、こまどり姉妹の『浅草姉妹』がヒットした。3月に『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』が創刊された。少年週刊誌時代の始まりである。児島明子が、ミス・ユニバース・コンテストで第1位に選ばれる。理想の体型はトランジスター・グラマー。そしてスモール、スウィート、スマイルが美人の代名詞であった。理想の男性は、石原裕次郎のようなタフガイ、小林旭のようなマイトガイであった。小林旭は、アメリカ西部劇のような映画『ギターを持った渡り鳥』でデビューした。

小学校6年生にもなると、感受性が強くなり、多くのものから影響を受けた。大衆娯楽の第1位が映画であった。石原裕次郎や小林旭が、タフガイやマイトガイとして活躍していた。美空ひばり、江利チエミと雪村いずみの三人娘が、スクリーンのなかで歌い踊っていた。かれらは、茶の間に侵入してきたテレビを通じて、子どもにまで影響を与えた。『スター千一夜』で、憧れのスターを身近に見ることができた。兄や姉たちが好きな石原裕次郎や小林旭に、自分たちも憧れた。『世界飛び歩き』では、海外旅行の夢を抱かせた。『番頭はんと丁稚どん』では、大阪流のドタバタ喜劇に笑い惚けた。テレビの影響は大きい。同時に『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』にも熱中した。

1960（昭和35）年は、12歳で、中学1年生。設備投資の増大、消費支出の拡大など、息の長い成長を実現したのが本年である。そして政治的には、安保闘争の年でもあった。高校生までもデモに参加したが、6月に安保条約が強行採決された。その政治的混乱の跡を継いだのが、国民所得倍増計画を打ちだした池田首相であった。高度成長にのり、レジャー・ブームもおきた。テレビ普及率も、前年の11.0%から23.1%と、2倍以上増加した。そして若い男性がおしゃれをはっ

きり意識しだした。本年、VANの石津謙介のアイビー・ルックがブレイクしたのである。1964(昭和39)年には、JUNがコンチ派というヨーロッパ調の服をつくる。アイビー派とコンチ派とに分かれて、ヤングメン・ファッションを盛りあげていくことになる。そして「格好よさ」という新しい価値基準をつくりだした。マスコミで話題になった六本木族が、今までの、裕福な上流家庭の若者だけでなく、中流階級の若者まで巻き込む形で、若者のライフスタイルに影響を与えた。歌謡界では、安保闘争のデモの帰り道などで、硬派の若者がうたった歌謡曲が、西田佐知子の『アカシアの雨が止む時』といわれている。闘争の挫折感を「アカシアの雨に打たれて、このまま死んでしまいたい」と歌った。政治から離れている、どちらかというとな軟派の若者は、橋幸夫の『潮来笠』の軽いのりの歌をうたっていた。橋幸夫と、後にデビューする舟木一夫と西郷輝彦が、団塊世代の特徴をあらわしている歌謡曲をうたっていくのである。3年後の1963(昭和38)年、舟木一夫が『高校三年生』でデビューする。1964(昭和39)年、西郷輝彦が『君だけを』をヒットさせる。3人ともレコード大賞新人賞を、デビューの年に獲得する。この3人は、「御三家」と呼ばれた。この3人の歌を分析することで、団塊世代の特徴をあぶり出すことが、本稿の目的となる。

1961(昭和36)年は、13歳で、中学2年生。景気は、7月にダウ1,829円74銭という史上最高値を付けるほど過熱気味で、12月からおだやかな調整局面を迎える。1億総レジャー時代の到来である。農業基本法が成立し、三ちゃん農家が急増した。農村から都会に働きに行く大人も若者も急増したのである。歌謡界も過熱気味で、静かな曲が目立った前年と対称的に、元気いっばいの威勢の良い曲が目立った。NHKテレビの『夢で逢いましょう』と日本テレビの『シャボン玉ホリデー』がスタートし、テレビ写りの良い演出をされた歌がヒットした。ハナ肇とクレージーキャッツの『スーダラ節』と渡辺マリの『東京ドドンパ娘』などがそれである。歌謡界は全体的にみると、常の10年分のヒット曲であふれていた。レコード大賞は、フランク永井の『君恋し』。石原裕次郎は、牧村旬子と『銀座の恋の物語』をデュエットで歌い、大人の甘く切ない恋の雰囲気表現した。若い世代の感覚を巧みにとらえた『上を向いて歩こう』が、坂本九により歌われて、世界的にもヒットした。『SUKIYAKI』として、世界69ヶ国で1,300万枚を売りあげる。上を目指して、ひとりぼっちになりながら懸命に働く若者の苦しみと悲しみを歌っている。NHKの「あなたが選ぶ時代の歌 ベスト100」の第2位である。クレージーキャッツの植木等が歌う『スーダラ節』は、サラリーマン世界のプレッシャーやストレスを、「分かっちゃいるけど、やめられない」と、半ばやけっぱちで笑い飛ばす歌である。この「分かっちゃいるけど、やめられない」は、この年の大流行語となる。安保闘争の挫折から、今度は政治の世界でなく経済の世界でサラリーマンとなり、出世競争に乗り出した若者が、この世界でもどうにもならない現状を半ばやけっぱちで笑い飛ばしているのである。戦前の流行歌のリバイバル・ブームもおきて

いる。うたごえ喫茶などで、『かあさんの歌』、小林旭の『北帰行』や多摩幸子と和田弘とマヒナスターズの『北上夜曲』などが歌われていた。これらの歌を聴いていた中学生のあいだにも、非行、いじめ、不登校など様々な問題が襲いかかっていた。高校進学率は60%で、高校への入学難が、もうおきている。彼らも大人と同じように、上を向いて歩こうとしたり、半ばやけっぱちで現状を笑い飛ばそうとしていた。

1962(昭和37)年は、14歳で中学3年生。景気はなだらかな調整過程をたどり、11月から1964(昭和39)年10月までオリンピック景気が続く。東京の人口が1,000万人を超える。そしてスモッグ被害も増えている。求人難で、若い世代では規模別賃金格差が縮小する。ツイストが流行する。レコード大賞は、橋幸夫と吉永小百合の『いつでも夢を』が獲得した。美しい歌詞と明るいメロディーが、若者に、夢と希望を抱くことの大切さを教えた。明るい時代の雰囲気の中なかで、30万枚を売り上げた。1960年代青春歌謡ブームの幕開けである。レコード界初の100万枚以上を売り上げたのが、村田英雄の『王将』である。高度成長の波にもみくちゃにされている大人は、「吹けばとぶよな」とわが身を歌いながら、「なにがなんでも勝たねばならぬ」と、わが身をむち打った。浪花節路線の始まりでもある。クレージーキャッツ旋風は続いている。『ハイそれまでよ』と『五万節』がヒットした。16歳の中尾ミエの『可愛いベイビー』と、14歳の弘田三枝子の『VACATION』と『子どもじゃないの』もヒットした。ミルクティーン歌手と呼ばれ、一世を風靡することになる。中尾ミエと伊東ゆかり、園まりが、デビューし、「新三人娘」と呼ばれた。新人賞は、倍賞千恵子の『下町の太陽』であった。安保闘争の挫折感を癒すはずの所得倍増計画は、ストレスと無責任さ、そしてふわふわとした物欲だけを増大していった。そこに、地に着いた、親しみやすい、まさに下町の太陽のような歌手がデビューしたのである。作曲賞は、ジェリー藤尾がうたった『遠くへ行きたい』(作曲・中村八大)であった。北原謙二が『若いふたり』をヒットさせる。

1963(昭和38)年は、15歳で高校1年生。オリンピック景気が続いている。三種の神器の普及も進む。白黒テレビは88.7%の普及率である。テレビ・アニメの国産第1号『鉄腕アトム』が放映され、最高40%の高視聴率を獲得する。テレビ・アニメ時代の幕開けでもある。マイカーも増える一方で、「一姫二トラ三ダンプ」という流行語が生まれた。レジャー・ブームも続いている。翌年に開催される東京オリンピックをひかえ、三波春夫や橋幸夫たちの歌う『東京五輪音頭』が、盆踊りの開場で流れている。一方で兼業農家が全農家の4割を超え、「三ちゃん農業」という言葉が流行した。レコード大賞は、梓みちよの『こんにちは赤ちゃん』が獲得した。マイホーム色の強い、幸せ歌謡曲である。ニューファミリーを形成する団塊世代の新しい母親の気持ちを歌っている。レコード大賞の新人賞を、学生服姿で歌った舟木一夫の『高校三年生』が受賞した。両曲とも、希望と期待、惜別とあきらめという、人間感情の矛盾する両要素が歌われてい

ることにより、ヒットしたのである。舟木一夫は、『学園広場』と『修学旅行』もヒットさせ、高校生歌謡（学園もの歌謡）というジャンルを打ちだした。三田明が『美しい十代』という、「十代」ということを強調した歌をヒットさせた。青春歌謡の全盛期である。レコード大賞の作曲賞を、坂本九の『見上げてごらん夜の空を』（作曲・いずみたく）が受賞する。『遠くへ行きたい』と『こんにちは赤ちゃん』も、作詞・永六輔と作曲・中村八大のコンビであった。

1964（昭和39）年は、16歳で高校2年生。10月にオリンピックが開催されるまでは、景気は維持されていたが、下期になると翌年10月まで下降局面に入る。生活程度の中流意識が、2年前の76%から87%になった。総中流意識がまんえんする。5月頃から、フーテンバックをかかえた「みゆき族」が銀座に横行するようになった。1日1,000人もハイティーンたちが、銀座のみゆき通りでダンスを踊ったり、ラリったりした。9月に取り締まりがおこなわれると、初秋には消えてしまった。4月に『平凡パンチ』が創刊された。その雑誌のコンセプトは、「モード、車、女の子」であった。「女にもてるための格好いいファッションと車」である。若者の価値基準が、今までのわかりづらい「勉強ができること」、「金持ちであること」、「喧嘩に強いこと」から、「格好いいこと」に代わったのである。感覚の解放である。『平凡パンチ』は、好き嫌いで、ファッションも、恋愛も、政治まで決めて良いというメッセージを発信した。創刊号は62万部、2年後には100万部を超えるまでになった。若者に受け入れられ、若者のサブカルチャーを変えていったのである。レコード大賞は、青山和子の『愛と死をみつめて』が受賞した。1年で130万部を売りあげたベストセラーを、吉永小百合の主演で制作した映画の主題歌であった。東京オリンピックで浮かれかえっているなか、ガンで死にゆく恋人との悲恋を静かに歌ったものであった。新人賞は、『君だけを』と『十七才のこの胸に』を歌った、17歳の西郷輝彦が受賞した。「御三家」が揃ったことになる。『アンコ椿は恋の花』を歌った都はるみも、新人賞を受賞した。コブシに独特なうなりを絡ませて歌う、新しい演歌の型を打ちだした。坂本九の歌う『幸せなら手をたたこう』と『明日があるさ』は、若者の「幸せ」をたくみに表現した。

1965（昭和40）年は、17歳で高校3年生。10月に景気の谷をむかえ、年末には幾分明るい兆しが見え始めるが、倒産が相次ぎ、「40年不況」と呼ばれた。流行語に、「ファイトでいこう」、「モーレッツ社員」、「やったるで」、「まじめ人間」など、高度成長に拍車をかけるような檄文調が増えた。原宿族がたむろするようになった。モンキーダンスが流行した。歌謡界では、ベンチャーズが来日し、日本でもエレキ・ブームが広がる。このエレキ・サウンドを巧みに取り入れてヒットしたのが、西郷輝彦の『星娘』であった。レコード大賞は、美空ひばりの『柔』という、浪曲調の歌である。新人賞は、バーク佐竹の『女心の唄』というド演歌であった。

1966（昭和41）年は、18歳で、大学1年生、あるいは社会人1年生。いざなぎ景気が始まる年である。景気上昇の年であったが、戦後最高の倒産を記録した。前年度にロンドンで発表され

たミニスカートが、日本に上陸した。3Cブームがおきた年である。ビートルズが来日し、バンドブームがおきる。ブルーコマッツやスパイダーズが結成された。後のグループサウンズの台頭を準備した。レコード大賞は、橋幸夫の『霧氷』、歌唱賞は舟木一夫の『絶唱』であった。西郷輝彦は『星のフラメンコ』をヒットさせた。マイク真木の『バラが咲いた』が70万枚を超えるヒットとなる。カレッジフォーク・ブームの始まりである。加山雄三の『君といつまでも』は、「ボカァしあわせだな」を流行語とさせた。小市民型マイホーム主義のはしりである。

2 団塊世代の特徴

昭和20年代生まれの団塊世代の特徴を、7つにまとめた。

① 二項対立の価値観をもつ世代

二項対立の価値観を持ち込み、公認させた世代である⁽¹⁾。戦後の価値観の混乱した時代、戦前の価値を否定され、新しい価値も示されない不定型な混乱した時代にあって、大人／若者という二項対立を持ち込み、若者という社会コードを社会的に初めて公認させたのが、団塊世代である。今まであった、大人と子どもという世代別コードの間に、若者という世代コードを持ち込み、独自の世界を構築しようとしたのが、団塊世代である。すでに石原裕次郎を象徴とするプレ団塊世代の若者が、1950年代半ばに、「無軌道な青春」、「暴走する若者」として大人世代から否定された形のだが、初めて、大人でも子どもでもない若者という存在を打ちだした⁽²⁾。その上にたち若者という存在を社会に公認させたのが、団塊世代である。団塊世代は、昭和20年代生まれの世代だから、プレ団塊世代と10歳前後のひらきがある。団塊世代は、大人から、プレ団塊世代の若者が「不良だから、あんなお兄ちゃんやお姉ちゃんみたいになっちゃだめよ」といわれていた。団塊世代が中学生になる1960年代前後から、単なる否定性にとどまらない、独自の内容をおびた若者のコードが形成されてくる。1958(昭和33)年にはカミナリ族が出現した。1961年には六本木族が注目され、加山雄三主演の若大将シリーズの第1作『大学の若大将』が公開された。絶大な人気を誇っていた植木等の「無責任シリーズ」や怪獣もの映画と並んで、東宝の1960年代を代表する大人気シリーズとなった。恐るべき明朗性と楽しい夢のワンパターンの映画であったが、こういう形での若者が公認されたのである。1971(昭和46)年まで全17作品がシリーズ化された。歌謡曲の世界では、1958(昭和33)年にロカビリーがブームになる⁽³⁾。今までは、子どもは文部省唱歌のような歌を学校や家庭でうたい、大人は料亭や裏通りの酒場、クラブで男女の恋愛模様、「人生はこうだ」という歌などをうたっていた。若者が、それらのどれにも属さない、自分たちの歌をうたいだしたのである。大人とは違う若者世界構築のための様々な試行錯誤

が、この頃になされていた。1960（昭和35）年、橋幸夫が『潮来笠』を歌い、若者の存在そのものを絶対肯定する。1961（昭和36）年、坂本九が『上を向いて歩こう』を歌い、若者の複雑な心情をあらわした。1962（昭和37）年、橋幸夫と吉永小百合が『いつでも夢を』のなかで夢を持ち続けることの大切さを歌い、レコード大賞を取る。60年代青春歌謡ブームの幕を開けたのである。大人と違う若者、大人のずるさに抵抗する純粋な若者、大人の限定性に反抗し未来の可能性にかけようとする若者が、歌謡曲でもうたわれるようになったのである。

② 感性の世代

二項対立の価値基準が感性である⁽⁴⁾。好きだから守り、大切にする。嫌いだから抵抗し、廃棄する。この特徴もプレ団塊世代から受け継いだ特徴である。石原裕次郎は、「イカす」とか「グツとくる」という言葉で、自分の感覚を解放した。プレ団塊世代の若者にとっては、自分の感性・好みに忠実に行動することは、主体的で、自由な行動である。アメリカン・カジュアルが格好いいから、その洋服を着る。六本木という場所が、どこか日本離れして好きだから、そこにたむろする。みゆき通りが格好いいから集まる。感性のままに行動した。だが自分の感性に忠実になるには、大人世界から大きな反発があった。プレ団塊世代以前の若者は、自分の好き嫌いを抑え、大人になるためにじっとガマンすることを強要されてきた。プレ団塊世代の若者でも、感性のままに行動できたのは、まだ少数の、金持ちの子どもに限られていた。金持ちの親からのこづかいで六本木にたむろしたり、親の会社のバイクを乗り回してカミナリ族となれたのである。ほとんどの若者は、古典的モラトリアムの状態を生きていた。だから大人は、感性のままに行動するプレ団塊世代の若者を、ワガママだ、不良だと非難した。団塊世代は、感性の解放をさらに広げた。大学紛争でデモすることが格好いい。フォークソングが好きだから歌う。1964（昭和39）年創刊の『平凡パンチ』が、若者の感性の解放を後押しする。1967（昭和42）年には、ヒッピー族の影響でサイケ（サイケデリック・ムーブメントの略）族が登場した。メンズ・ファッションのユニセックス化が進んだ。好きなら、女の子っぽい服でも着る。大学紛争のさなか、若者が、洋服のTPOを無視し、好きな時に、好きな服を、好きなように着るようになる。ミニスカートやジーンズが感性に合うから着る。大学紛争も下火になった1971（昭和46）年には、「フィーリング」という言葉が流行した。団塊世代の「感性との適合」をあらわす言葉である。団塊世代における感性の解放は、依然として反対が多かったが、プレ団塊世代が道筋をつけたこと、さらに団塊世代の人数の多さで、次第に社会的に公認されていくのである。

③ アメリカン・ドリームをみた世代

若者の感性に合い、格好いいと感じられたのが、アメリカのファッション、歌、生活様式、三

種の神器や3Cなどの耐久消費財であった。団塊世代は、アメリカに洗脳された世代である⁽⁵⁾。日本は、1950（昭和25）年の朝鮮戦争をきっかけに、アメリカ文化圏の一員に組み込まれていく。歌謡曲の世界では、生まれた時から大人が、豊かな国アメリカへの憧れを『憧れのハワイ航路』で歌っていた。小学校入学前には、人気絶頂の三人娘の江利チエミと雪村いずみは、アメリカ讃歌の『テネシーワルツ』や『想いでワルツ』などを歌った。小学校に入学する前から、アメリカン・ドリームが、歌謡曲という形で耳から入っていたのである。小学高学年生になると、上の世代がロカビリーや、ジャズなどを流行らせ、アメリカのリズムに酔いしれた。ファッションも、映画の影響でアメリカン・スタイルが全盛になる。シネマ・ファッションの流行である。1954（昭和29）年、『ローマの休日』がヒットし、ショート・カットが流行した。その後に『麗しのサブリナ』の影響でサブリナ・パンツが流行した。ヘップバーン・スタイルの流行である。1955（昭和30）年、マンボのリズムで熱狂的に踊る若者のあいだに、マンボ・ズボンが流行した。1955（昭和30）年、大人の世界では、ディオールがAライン（春）、Yライン（秋）を発表し、シャネル・スーツも話題になった一方で、若者の間では、ジャンパー・スタイルや落下傘スタイル、ダスターコートなどのアメリカン・スタイルが流行していた。1957（昭和32）年、大人の世界では、イタリアモードが流行し、若者のあいだでは、カリブソ・スタイルが流行する。脱色した茶髪も若者のあいだで流行る。フランスやイタリアの大人のファッションと異なり、スポーティーでエネルギッシュな洋服であり、若者の感性にマッチしたアメリカン・カジュアルの流行である。1964（昭和39）年には、ケネディ大統領が愛用したアイビー・スタイルを流行させる。団塊世代は、高校生になっているから、この流行を拡大していく。1969（昭和44）年に、アメリカ映画やテレビの影響から、ジーンズを本格的に流行させたのも、団塊世代である。

テレビが普及し始めた1950年代後半から1960年代にかけてアメリカ製のホーム・ドラマが、お茶の間をにぎわした。テレビが若者や子供に大きな影響を与えていく。「テレビっ子」が問題になった。団塊世代が、最も感受性の強い10歳前後の頃である。1958（昭和33）年にアメリカのホーム・ドラマ『ビーバーちゃん』が放映された。その後も『パパは何でも知っている』、『うちのママは世界一』、『陽気なネルソン一家』などが放映され、アメリカ中流階級の生活が、日本の茶の間に映し出されたのである。緑の芝生の庭がある一戸建ての住宅、リビングルームには絨毯がひかれ、大きなソファとテレビが置かれている。十分な年収を得て身なりの良い夫が、健康的な子どもと、大きなソファに座り、明るく話しながらテレビを見ている。大きなコリー犬もいる。台所では、専業主婦の美しい妻が、白く大きな冷蔵庫から高価な食材を出し、グリルで美味しそうな料理をつくる。ランドリーには電気洗濯機が備え付けられている。車庫には大きな自動車がおかれ、休みの日には、家族でドライブに行く。豊かな物に囲まれたアメリカン・ウェイ・オブ・ライフが、日本人の憧れになった。庭もない、六畳一間の居間兼寝室に置かれたちゃ

ぶ台で、塩辛い鮭やコロケなどの質素な食事をし、台所も便所も共同のような生活環境から見ると、まさにドリームであった。この夢と憧れが、昭和20年代後半のスピッツ・ブーム、昭和30年代後半の三種の神器のブーム、昭和40年代前半の3Cのブームとなっていく。日本人がアメリカ人になりたいと、真剣に思ったのである。日本に固有の、伝統的生活様式が否定され、忘れ去られていこうとしていた。

ただし団塊世代は、伝統的文化様式を忠実に守ってきた親の背中をみてきた世代である⁽⁶⁾。小・中学生の頃、親の行動をまねるかたちで田舎の慣習や風習に従ってきた。農村だけでなく、都会にも、下町などの伝統的慣習を忠実に守る親がいて、子どもたちは疑問ももたずに従ってきた。反抗期の10代後半になり、親たちが守ってきた伝統的慣習や生活様式を否定しても、心の奥深いところで完全に否定しきれないのである。親に反抗しても、親の大切さ、偉さは分かっているのである。アメリカ流の近代的で合理的生活を理想として目指すのだが、日本の伝統的で非合理的な慣習も完全に否定しきれないで、守り、従ってしまう。集団就職で田舎から、自由な都会に出てきても、田舎の伝統的慣習を、心の片隅に持ち続けているのである。伝統の残り火を都市生活に持ち込んだ世代でもある。次節で説明するように、アメリカ的なファッションや製品を感性に合う物として肯定し、日本の伝統的な慣習・生き方に抵抗してきたのが、団塊世代である。だが日本が昔から伝えてきた慣習、昔からの「なつかしい共同性」までは否定・抵抗できていない。逆にそこに戻り、癒しを感じる傾向がある。特に団塊世代が年齢を重ねれば重ねるほど、その特徴が色濃く表れてくる。現在、廃れた祭りや神社・仏閣などの再興のために、多くの団塊世代が活躍している。退職後は田舎にもどり、農業をしながら、若い頃捨てた故郷のために行動することが、ひそかなブームになっている。

④ 抵抗する世代

団塊世代の基本的特徴は、二項対立の価値観をもつことであった。他の項との違いを鮮明にする方法として、抵抗という手段をとった⁽⁷⁾。社会の主流派を占める大人の世界に対して、反主流の少数派の世界を確立させるために若者がとれる手段は、抵抗以外になかった。二項対立の少数派に立つから、多数派に抵抗する。若者は、大人の価値観を否定し、大人の大きな世界に飲み込まれることに抵抗することで、自己を確立しようとした。プレ団塊世代の太陽族、みゆき族、六本木族、原宿族、カミナリ族とイナズマ族は、社会風俗という面での抵抗であった。60年安保での全学連やデモ隊としての抵抗は、政治面での抵抗活動であった。団塊世代の政治面での抵抗は、アメリカが北ベトナムの空爆を開始する1965（昭和40）年からの、ベトナム反戦運動から始まる。安保反対やアメリカ帝国主義への反発が、大学での学費値上げ、カリキュラム問題とからんで、学生ストライキを頻発させた。1968（昭和43）年から1969（昭和44）年がそのピーク

であった。1968（昭和43）年には、全国115の大学が紛争状態にあり、学外でも反戦運動が盛りあがっていた。1969（昭和44）年安田講堂が鎮圧されると、次々と大学のバリエード封鎖が取り除かれていった。1972（昭和47）年の浅間山荘事件、妙義山ランチ事件を契機として、学生運動は退潮していく。社会風俗での批判では、1967（昭和42）年超ミニの登場、フーテン族やヒッピー族の登場があげられる。『男はつらいよ』の第1作が公開され、フーテンの寅のような生き方に憧れた。暴走族もはしりまわった。歌謡界では、1966（昭和41）年マイク真木の『バラが咲いた』（70万枚を売りあげ、レコード大賞の作曲賞）、ザ・ブロードサイド・フォーの『若者たち』などのフォークソングが社会批判的内容の歌をうたっていた。1969（昭和44）年安田講堂が落城した年の7月、新宿駅西口地下広場での、ベ平連主催のフォーク集会の参加者7,000人にたいして、機動隊がガス弾を撃ちこみ、鎮圧した。1969（昭和44）年第2次フォークソング・ブームがおきる。その歌は、社会風刺、プロテストの色合いが強い。1967（昭和42）年岡林信康の『思い出の赤いヤッケ』、1968（昭和43）年高石友世の『受験生ブルース』が、先鞭をつける。1968（昭和43）年ザ・フォーク・クルセダーズの『帰ってきたヨッパライ』の大ヒットが、フォークソングへの注目度を高め、フォークソングのブームを盛りあげた。1972（昭和47）年には吉田拓郎の『旅の宿』や『結婚しようよ』、『たどりついたらいつも雨ふり』がヒットした。抵抗では、政治面でのデモも、風俗面でのフォークソングでもかわりがない。感覚に合えば、格好いいと感じれば、デモにも参加し、フォークソングを歌った^⑧。この特徴は、団塊世代が学校を卒業し、社会に出てからも生きつづけ、市民運動や生協、ボランティアに抵抗の場を見いだしている。

⑤ 消費によって自己表現する世代

感性に合うものを消費し、格好いいことが自己表現になった^⑨。消費革命がおきたのは、昭和30年代半ばに所得倍増計画が実施され、高度成長が急速に進んでからである。その頃から、一部の金持ちだけでなく日本人全体が豊かになり、広範に消費生活を楽しむようになったのである。1964（昭和39）年、生活の中流意識が87%に達した。大人は、アメリカの中流生活というドリーム（目標）に向かい、人に遅れないように耐久消費財をひとつひとつ消費していった。だからテレビ、冷蔵庫、洗濯機が三種の神器と呼ばれたのである。それでも不足で、3Cという目標を追い求めた。三種の神器と3Cの消費という形で、アメリカに憧れる日本人という自己表現をしていたのである。若者の世界では、ファッションの消費という形で、大人でも子どもでもない若者であるという自己表現をしていた。アメリカ映画の影響で、アメリカン・カジュアルというファッションが流行した。1960年代の若い女性は、ヘップバーンのようになりたかった。男性は、アメリカ人のように足の長い石原裕次郎のようになりたかった。このようにおしゃれという形で自

己表現をした最初が、プレ団塊世代の若者である。VANを最初に流行らせたのもプレ団塊世代である。だがプレ団塊世代で消費にかかわることができたのは、少数の金持ちの息子や娘だけであった。団塊世代は、プレ団塊世代が開発した「消費によって自己表現」という特徴をさらに拡大・拡充したのである。団塊世代の消費への関わり方は、所得が倍増したあとの時代であり、若者も余裕があり、多くの若者が消費に殺到した。中卒が「金の卵」と呼ばれ、若者の賃金も全体的に上昇し、消費で自己実現できたのである。団塊世代は、大人も子どもも、若者も揃って消費をする。団塊世代が小学生、中学生の頃に消費し、爆発的にヒットさせた商品消費は、1956（昭和31）年の「ホッピング」、1957（昭和32）年の「赤胴鈴之助の刀」、1958（昭和33）年の「フラフープ」、1959（昭和34）年の「ミニカー」、1960（昭和35）年の「ダッコちゃん」である。団塊世代が、高校生、大学生の頃になると、フォーク・ギター、ジーンズやミニスカート、長髪とファッションの消費で、自己表現をしていく。ギターを弾き、ジーンズやミニスカートをはかないと、若者の輪には入れなかった。ステレオ、楽器、カメラが、独身貴族の三種の神器であった。これらが、若者たちの仲間意識と連帯感の象徴でもあった。消費が、若者であることの自己表現であった。

その消費スタイルは、二項対立の少数派に位置づける特徴があった。「大人＝主流＝多数派＝不純」というコードにたいして「若者＝反主流＝少数派＝純粋」というコードに合致する商品の消費をした。大人からは不良っぽいと非難されたり、眉をひそめさせるような商品の消費で、若者の自己表現をした。1965（昭和40）年から若者のあいだで流行しだしたミニスカート、1967（昭和42）年から流行したジーンズや長髪は、大人から不良っぽい、だらしないと非難されることで、若者の連帯感を高めていったのである。大人世界に対する抵抗が、若者の世界をまとめあげていったのである。

この二項対立は、若者のあいだでの二項対立につながっていた。若者のあいだでも、アイビー派かコンチ派か、ビートルズ党かストーンズ党かという、人格をかけた対立をしていた。その若者のあいだでの二項対立においても、少数派の方が本物で正しいという価値基準は同じであった。多数派の保守本流に反抗し、少数派のマイナーなものに執着する傾向は、大人になっても続いている。マスプロ商品嫌い、自分だけの商品探し、新しもの好きは、若い頃から、今でも続いている。ものにこだわり、ひと言講釈を語りたがるのである。

⑥ 「君」を発見し、「二人」（ふたり）をつくりあげた世代（友達婚と友達夫婦の世代）

団塊世代は、昔ながらの集団主義や男尊女卑は悪であり、個人主義・民主主義や男女平等は善であることを小学生の頃から教え込まれてきた。男女共学で、運動会ではダンスも踊った。思春期になり異性を意識するようになると、彼女に自分の恋心を知られたり、告白することは、彼女

が身近にいるからこそ恥ずかしく、ためらわれた。遠くから、思いを込めて一方的に見守るだけであった。そのような相手が、「君」である。集団主義の仲間の一員としての「君」ではない。結婚相手の「君」でもない。遠くから見つめるだけの「君」である。青春歌謡曲の世界では、1964（昭和39）年に、このような「君」が歌いだされる。「君」の発見である。やがて「君」との距離が近くなり、話し合ったり、見つめ合ったりする「二人」が歌われる。さらに「君」と「僕」との夢や道を対等に認め合い、それらを合わせて「二人」をつくろうとする。そして「死ぬまで君を離さないぞ」という結婚相手の「君」になる。歌謡曲の世界で、「君」を発見し「二人」を形成したのは、団塊世代が初めてである。このことは、次節で詳しく論じられる。

だから団塊世代が、恋愛結婚を拡大し、「二人」の友達夫婦というニューファミリーを形成していくことになる⁽¹⁰⁾。団塊世代の女性は、1971（昭和46）年から1972（昭和47）年に結婚のピークを迎え、1973（昭和48）年から1974（昭和49）年に出産のピークを迎える。団塊世代の男性は、1973（昭和48）年から1974（昭和49）年が結婚のピークで、1975（昭和50）年から1979（昭和54）年に子供をもうけた。いわゆる団塊ジュニアである。

団塊世代の男女は、理想とする3歳の差でなく、同年齢の相手と結婚した。女性からみると、3歳年上の男性は少ない。男性からみると、3歳年下の女性も少ない。人口のアンバランスから、友達夫婦ができあがった。そして見合い結婚でなく、恋愛結婚が多数派となった最初の世代である。1965（昭和40）年から1969（昭和44）年に恋愛結婚と見合い結婚の割合が同じになり、以後恋愛結婚の比率が大きくなる。

25歳から29歳の女性が理想の家庭として性役割分担型を選ぶ比率は、1973（昭和48）年の44%、1978（昭和53）年34%と下落する一方である。逆に増加していったのが家庭内協力型である。1973（昭和48）年20%、1978（昭和53）年21%、1983（昭和58）年40%と増加し、2003（平成15）年には59%となる。夫唱婦随型は、20%前後で増減しない。男女別でみると性役割分担型の比率が、男性が多く、女性が少ない傾向がある。男性は、亭主関白とかわいくて尽くしてくれる妻を理想とし、女性は、家事も難なくこなすおしゃれな夫を理想とした。家庭内協力型は、男女の比率が変わらない⁽¹¹⁾。

⑦ 大都市に大量集住した世代

団塊世代は、就職や進学で大都市に移り住み、そこで自由な、感性にあった生活をし、アメリカン・ドリームを実現していった世代である。「集団就職」という言葉が生まれたのは、1956（昭和31）年集団就職列車が開始されていらいである。集団就職列車は、団塊世代が中学校を卒業する頃にピークに達する。1963（昭和38）年78,000人、ピークの1964（昭和39）年78,400人、1965（昭和40）年73,000人が、35道県から列車に揺られ、大都市に流入した。1973（昭和

48) 年まで、延べ 3,000 本が運行された。

新規中卒者の求人倍率は、1959 (昭和 34) 年 1.2 倍、1960 (昭和 35) 年 1.9 倍、1961 (昭和 36) 年 2.7 倍、1964 (昭和 39) 年 3.9 倍で、1961 (昭和 36) 年には中卒者初任給が 24% 上昇した。まさに「金の卵」であった。東京都と地方の給与格差は大きかった。1960 (昭和 35) 年の東京の中卒初任給を 100 とすると、東北で 71。学校を卒業して農業に就く「農業 1 年生」は、1955 (昭和 30) 年 3 月卒の 26 万人から、1960 (昭和 35) 年の 13 万人と、5 年間で半減している。地方農村部の若者が、職を求めて大都市に集中したのである⁽¹²⁾。

1955 (昭和 30) 年、東京に住む 15 歳から 19 歳の若者は 90 万人、1965 (昭和 40) 年 130 万人に急増した。20 歳から 24 歳は 102 万人から 158 万人に増えている。15 歳から 24 歳の合計は 96 万人で、東京全体の増加人口の 34% を占めている。1960 年代、若者が大量に都市部に流入し、台頭し、大きな力を発揮したことが分かる。地方から来た若くて貧しい独身の若者が、高度経済成長の波にのり、結婚し子供をつくり、マイホームをつくり、アメリカン・ドリームをひとつひとつ実現していくのである。

ただし団塊世代は、都市に流入し、自由気ままな都市生活になれていっても、田舎の伝統的慣習を忘れない世代である。お盆や正月には、混雑のなか、帰省を繰り返えし、田舎の古くさい慣習を都会の生活に持ち込んでいた。

団塊世代の特徴を 7 つあげてきた。この 7 つは、それぞれ関連しながら、団塊世代を特徴づけている。まとめてみよう。

団塊世代は、二項対立の価値観をもつ世代である。大人でもない子どもでもない若者という項目 (社会コード) を社会的に認めさせた世代である。大人に属する項目は、主流派、多数派、保守、集団主義、節約、田舎、日本の伝統・慣習、不純などである。若者が求めた項目は、反主流、少数派、革新・抵抗、個人主義、消費、都会、アメリカン・スタイル、純粹である。大人の世界は大きく強いので、若者という世界を新たに構築するためには、抵抗という手段をとらざるをえない。プレ団塊世代が、太陽族として若者の世界を初めてうちだしたが、不良、無軌道と否定された。団塊世代の時代になると、若者の世界が徐々に認められてくる。ヒッピー族、アングラ族、フーテンと揶揄されるが、ミニスカートもジーンズも若者ファッションとして公認されてくる。若者内の世界にも二項対立がある。より少数派に属する純粹な項目を求めた。その二項対立の価値基準は感性である。団塊世代は、映画やテレビに映るアメリカのファッションや生活を格好いいと感じたから、真似をし、消費した。大都市の生活が田舎より格好いいから、移り住んだ。「君」と「僕」との平等な関係が好きだから、「二人」という関係をつくった。見合い結婚より恋愛結婚が感性に合っているから、恋愛結婚をした。性役割分担型の家庭より家庭内協力型つまり

友達夫婦の方が格好いいから、そのようなニューファミリーをつくりあげた。このように理論でなく感性を基準とするから、二項間の対立も弱いところがある。都会に出て、田舎の旧習を否定し、田舎に残した親に抵抗しても、小学生・中学生の子どもの頃は田舎での伝統的慣習にどっぷりとつかってきた世代だから、頭で否定しても、心で否定しきれない。田舎の慣習を都会にも取り込んでしまう。感性を規準にするから、若者のあいだでも硬派と軟派の区別ができづらい。うたごえ喫茶にいたり、ジャズ喫茶にいたりする。デモに参加したり、ギターをもってフォークを歌う。どちらも感性に合うのである。このような若者を培ったのが歌謡曲であり、その歌謡曲が若者のあり方を歌っている。

3 歌謡曲の分析

1960年代の歌謡曲の分析の前に、1960年代が、団塊世代にとってどのような年であったかの確認から始めよう。1960年は、まさに60年安保の嵐が吹き荒れた年、若者を中心とした580万人が、デモとストに明け暮れた年であった。国会を取り巻く学生たちが口ずさんだ歌が、西田佐知子の『アカシアの雨が止む時』であった。「このまま死んでしまいたい」というフレーズが、安保闘争の敗北感を表現しているとともに、その挫折感をいやしてくれる個人生活への回帰をも表現している。本稿で取り上げる団塊世代の代表は、1947（昭和22）年生まれでまだ13歳の中学1年生である。デモに参加するには、はやすぎる。高校生はデモに参加し、全国高校長協会から、高校生のデモ参加を諫める声明が出ているほど、高校生のあいだでは関心が深かった。3歳若い中学生でも関心はあったが、デモに参加するには若すぎた。またこの年は、安保闘争の混乱のなかから池田内閣の所得倍増計画が実施され、高度成長の本格的始動の年でもあった。労働力不足で、中卒は金の卵として引っ張りだこであった。消費革命もおき、三種の神器などの耐久消費財の消費拡大、レジャー志向も高まりをみせた年であった。そして若い男性がおしゃれをはっきり意識しだした年であった。VANの石津謙介のアイビー・ルックがブレイクしたのである。「格好いい」、「おしゃれ」という感覚を価値基準にしても良いという生き方を、上の年代のプレ団塊世代が普及させようとした年である。これは、下の年代の団塊世代にも強く影響を与えている。感性に合い、格好良いことは、素晴らしいことだということを教わった。

1961（昭和36）年は、もはや戦後ではないといわれた年で、景気が過熱気味に移行する。高度成長を推し進めるために農業基本法が成立し、農村から都会への出稼ぎがさらに増え、若者の農村離れも進む。歌謡曲界も、『東京ドドンパ娘』や『スーダラ節』など威勢の良い曲が目立った。永六輔と中村八大のコンビの『上を向いて歩こう』という名曲を坂本九が歌い、大ヒットした。

1962(昭和37)年は、オリンピック景気の始まる年である。『いつでも夢を』がレコード大賞を受賞し、60年代青春歌謡ブームが始まった年でもある。クレージーキャッツ旋風が吹き荒れている。一方で『王将』が100万枚の売りあげを記録している。北原謙二が、『若いふたり』を歌った。

1963(昭和38)年は、『高校三年生』が、レコード大賞新人賞と作詞賞を受賞する。『こんにちは赤ちゃん』がレコード大賞である。三田明が、『美しい十代』をヒットさせた。

1964(昭和39)年は、東京オリンピックが開催された年である。西郷輝彦の『君だけを』が、新人賞を獲得する。団塊世代の特徴を端的にあらわしている御三家が揃ったことになる。

1965(昭和40)年は、戦後最長の拡張期間を誇る「いざなぎ景気」が始まる年である。

1966(昭和41)年は、レコード大賞に橋幸夫の『霧氷』、歌唱賞に『絶唱』が受賞する。加山雄三の『君といつまでも』の大ヒットは、映画『若大将』シリーズの人気を不動のものにした。

本節では、『潮来笠』、『上を向いて歩こう』、『いつでも夢を』、『高校三年生』、『君だけを』という5曲を中心に分析することで、団塊世代の特徴を浮かびあがらせていく⁽¹³⁾。

(1) 『潮来笠』は、1960年代を切り開く歌謡曲である

この歌で、なぜ潮来が舞台になるのか。潮来を歌った名曲は、花村菊江の『潮来花嫁さん』、白根一夫の『潮来船』など数多く歌われている。潮来は戦前から観光の名所であり、当時のレジャー・ブームにのり、潮来に観光に行く人も多かった。都会が舞台でなく、皆に知られている田舎が舞台になっている。潮来は、田舎から出稼ぎや、集団就職で都会に出て働いている人びとにとり、自分の故郷の代わりになる場所である。潮来という舞台は、皆に親近感を抱かせ、歌に入りやすい効果がある。

歌は、笛と三味線を伴奏とした軽やかなイントロから始まり、股旅姿の橋幸夫が三度笠で顔を隠しながら登場する。

第1節は、「いたこのーいたろおー」と、伸びやかな自己紹介から始まる。彼は、チョット見た目では「薄情そうな渡り鳥」の股旅者に見える。股旅者は三度笠をかぶり、自分の顔つまり内面をさらけ出さない。だから他人の目からは、薄情そうに見えるわけである。それでも、「それっええでー いいのおおさー」とドスを利かせた歌声で、内面をさらけ出さないこと、本性を理解されないことを自己肯定する。自分は、風のように自由気ままに、東西をうろついている。気ままな自由を謳歌している。「なのにヨーー」、捨ててきた故郷を思い出してしまう。潮来笠をかぶっていた彼女あるいは母親を目に浮かべてしまう。

第2節は、女性がかぶる「田笠の紅緒」が目の前でちらつき、気になるようでは、肩に担いでいる「振り分け荷物」が重かろうと、心配されている状況の説明から始まる。「田笠の紅緒」は、

農村の田舎に残してきた恋人・母親を象徴している。肩に担いだ振り分け荷物は、責任や義務を象徴する。つまり故郷を捨て、都会で、風の吹くまま気楽にすごしていても、心の片隅では、故郷に残してきた恋人や母親が気になってしょうがない若者の気持ちを表現している。残してきた恋人や母親に重い責任を感じざるをえない。重い責任を感じ、悩んでしまうが、「重かるに」と同情されると、「わけはきくなと」軽やかに笑ってみせる。さらに「粋な単衣」を腕まくりして、気にしていないから大丈夫だと、平気なふりをする。都会に出て、おしゃれに目覚め、格好いい洋服を着て、格好をつけて生きている。「腕まくり」までして格好をつけ、故郷の恋人や母親は忘れた、これからは、格好つけた生き方で、感性のまま粋がって生きる、と居直る。だが「なのにヨーー」、潮来笠＝故郷を思い出してしまう。

第3節では、何年も故郷をあとにした今になって、「いまさら知った 女の胸の 底の底」と歌う。何年もたってやっと、残してきた恋人・母親の心、故郷のありがたみ、捨て去った故郷の慣習・伝統の意義の本物を知ることができたという。だが今は人生の要のところにいる。「ここは関宿 大利根川へ」と、人生を川になぞらえ、この今が人生を左右する関所のようなところだと歌う。「人にかくして 流す花」、つまりいまさら故郷や伝統に戻れないで、人に隠れて涙を流している。故郷に帰り、恋人や母親に甘え、慣れ親しんだ慣習にやすらぎを感じたいのだが、できないので涙が出る。その理由を、「だってヨーー あの娘 川下」と、軽ろやかに歌う。あの娘＝伝統・慣習は、上昇する高度成長が捨て去った川下（田舎、故郷、農村）であり、もう戻れない。都会に生活する自分は、川上つまり高度成長の上昇機運のなかを登らなければならない。

『潮来笠』は、団塊世代の特徴をあらわす歌謡曲の典型である。同時に1960年代という全く新しい時代を切り開いた歌謡曲でもある。「薄情そうな」若者が全面肯定されることから、1960年代が始まるのである。「それっええでー、いいのおおさー」と全面肯定される。「それで良い」という、軽やかな絶対肯定が、当時の若者の心をとらえたのである。伊太郎が笠をかぶっている理由は、「薄情そう」といわれても、本心をさらけ出さないことである。笠は、未知の土地に入るとき顔を隠して警戒する道具である。1960年代は、安保闘争や高度成長の激変の時代である。若者にとり、二項対立における自分の態度を鮮明に出さねばならない年である。新しい時代に入り、態度を決めかねている若者を、「移り気な風が吹くまま」気ままに生き、「ちょっと見なれば薄情そう」、無責任そうでもいいのさと、後押しする。第2節と第3節での内容は以下のとおりである。故郷に残してきた娘、母親、伝統・慣習を思うと、重い責任を感じてしまう。都会に出ていまさら、故郷に残してきた娘、伝統・慣習の大切さを、心底知った。だが川下には戻れない。今は肝心かなめの時である。世の中は高度成長の時、大変動期である。古い農業を捨て、近代工業化を進める時である。前進あるのみである。だから腕まくりをして、格好をつけて、過去は捨てた、責任は感じないと、笑うだけである。だが本心では悲しい。このように二項対立に揺れる

若者を、軽やかに肯定する。「二項対立の世代」という特徴①を端的にあらわしている歌謡曲である。歌の主人公伊太郎は、⑦の特徴「地方から大都市に移り住んだ若者」がなぞられている。②の特徴「感性の解放」が、笠で顔を隠し、チョットみれば薄情そうな生き方、移り気で、風の吹くまま西東に旅する生き方である。後のフーテン族に通じる生き方である。映画『男はつらいよ』のフーテンの寅の生き方そのものである。この歌がうたわれた1960（昭和35）年は、団塊世代の代表者はまだ中学1年生の子どもで、中学校でのいじめや不登校などの問題はあるが、若者における二項対立のむずかしさを切実には感じていない。就職のために都市へ移り住んでもいない。だが中学1年生といえば感受性も強く、兄や姉などの少し年上の若者をみている。だから『潮来笠』の内容を理解できたし、それに影響もされたのである。1980年代の漫才ブームの時、ザ・ぼんちの「ぼんちおさむ」が、橋幸夫のふりを強調し、「い・た・こ・の・い・た・ろう〜」とか「そ〜れっえ〜えで〜、い・い・の・お〜お・さ〜」とパフォーマンスし、笑いをとった。この歌の意味である「若者の二項対立における絶対肯定」は、20年後の1980年代においても意義を持ち続けたのである。

(2) 作詞・永六輔と作曲・中村八大で1961（昭和36）年に大ヒットした『上を向いて歩こう』は、若者の心情を巧みに歌にこめている

歌は、木琴の軽やかな伴奏から始まる。ニキビ顔の、坂本九が登場する。

第1節は、脱日本語化された発音で「う・え・を・む・う・い・て、あーこうおうおうおう」と歌うことから始まる。聴く人を、日本的でないところに移行させる。普通、前を向いてなら歩けるが、上を向いては歩けない。この発音の「上を向いて歩こう」を聴くと、歩けるような気がしてくる。次に上を向いて歩く理由が、「涙がこぼれないように」と歌われる。その理由を、失われた過去やまだやってこない未来をとりあえずカッコに入れ、涙がこぼれないように、と歌う。「上」とは、高度成長の目指す「上の生活」である。所得倍増計画で、三種の神器の電気掃除機もそろえた。電気洗濯機や、無理をすれば電気冷蔵庫も買えるだろう。ブームになっているレジャーにも行けた。若者の三種の神器のステレオ、楽器、カメラも買った。幸せをつかんだ。だが涙が出てきて止まらない。どうしても「春の日」のことを、思い出してしまう。おだやかな「春の日」には、故郷で家族や恋人がまわりにいた。だが今は都会に出て、故郷より物質的には良い生活をしているが、「一人ぼっちの夜」を過ごしている。淋しい。

第2節は、「上を向いて歩こう にじんだ星をかぞえて」と始まる。「星」は、「希望」を象徴している。アメリカン・ドリームである。「星をかぞえて」とは、アメリカン・ドリームを実現した数を数えること、理想とするアメリカのような生活用品を、どれだけそろえられたかを数えることである。だが星はにじんでいる。汗や涙でにじんでいる。星をつかむためにどれだけ努力

し、苦勞し、涙を流したことだろうか。上を向いて歩いて、希望の星をひとつひとつ、努力して獲得してきて、幸せだ。幸せなはずだ。だがどうしても、「夏の日」を思い出してしまう。故郷の生活は、ステレオや電気洗濯機のようなアメリカ流の生活用品もなかったが、皆がいた。夏のお祭りの日、お盆の時など、熱い連帯感があった。都会では、多くの物に囲まれているが、一人ぼっちだ。

第3節では、「幸せは、雲の上に」あることが確認される。幸せは、雲の上や空の上にある。現在のずっと先の未来にある。幸せは、雲の上の存在、空にたなびき消えていき、決して手の届かない存在である。永六輔と中村八大の同じコンビでつくられ、坂本九が、1964（昭和39）年『幸せなら手をたたこう』で歌ったように、手をたたか、足をならすか、肩をたたくなどの態度でしか確認しようがないほど、幸せは、はかない存在である。同コンビでつくられた1964（昭和39）年の『明日があるさ』で歌われているように、夢が実現する明日は、「明日があるさ、明日があるさ」と待ちぼうけなのである。それでも幸せを求め、働き続けなければならない。仕事から帰る夜に、一人でいるとふとむなしくなり、涙が止まらない。

第4節が歌われる前に、哀愁を奏でる口笛が流れる。若者の甘く切ない心の内を良く表現している。口笛は、夜一人でいる時にふっとでてくるものである。夜空を一人で見上げる時など特にである。口笛のあと、歌は、「思い出す 秋の日」と、哀愁たっぷりに始まる。故郷の実り豊かな秋の日を思い出すと、一人ぼっちの都会の夜が淋しい。

最後の節は、「悲しみは星のかけに 悲しみは月のかけに」と始まる。「星」のような夢の製品を購入した。だから悲しむのは「かけ」、つまり後回しにし、中止しよう。星よりも大きく明るい「月」のようなアメリカン・ドリームの商品を購入した。だから悲しむのは後回しにして、中止しよう。だがひとりぼっちでむなしく、悲しい。涙が出てくる。「涙がこぼれないように 泣きながら 歩く」。悲しくても「歩く」。悲しいから「歩く」。「上を向いて」、未来に向かって働き続ける。だが「一人ぼっちの夜」は淋しい、と哀愁を含ませたメロディーを口笛で吹き、歌が終わる。

この歌を題材にした同名の映画では、田舎から東京に働きにきた若者が、えがかれている。都会の金持ちの娘に恋をして、無理をしてアイビー・ルックのような高い洋服を買い、格好をつけようとする若者、工場で働いて、体をこわし帰郷する若者など、様々な若者の姿がえがかれていた。

この歌の最大のヒット要因は、「涙がこぼれる」という、日本的悲しみや情念を、からりとした明るいリズムで歌ったことである。リズムや歌い方を脱日本語の「う・え・を・む・う・い・て、あーこうおうおうおう」にすることで、感情の持っていく場所を、日本的でないところに変えたのである。つまり怨念がらみの悲しみや陰鬱なさみしさから、からりとした悲しみや明る

いさみしさに変えたのである。坂本九は、ジャズ喫茶で歌っていた経験があり、その歌い回しがこの曲にでたのである。この脱日本語の歌い回しは、人びとを前向きにさせ、再起を促す傾向がある。若者にとり、高度成長の波にのり、上を目指し、アメリカン・ドリームの星という希望をひとつひとつ実現していても、幸せは雲の上で、実現できない。田舎の春、夏や秋の日をなつかしく思い出す。きびしい冬の日、父親が出稼ぎに出てきびしい日が続いたので、思い出さない。春夏秋、物はなかったが皆がいた。貧しかったが、一人ではなかった。故郷には、本当の幸せがあった。都会には、にじんだ星はあるが、悲しい一人ぼっちの夜しかない。その悲しみ、さみしさを、坂本九が、からっと歌いあげたのである。

「歩こう」の「こう」にも注目する必要もある。1962（昭和37）年、作詞・永六輔と作曲・中村八大の同コンビで、ジェリー藤尾が歌った『遠くへ行きたい』と重なる感性が、この歌と『潮来笠』でうたわれているのである。『遠くへ行きたい』では、「知らない街」、「しらない海」、「どこか遠くへ行きたい」、「ながめてみたい」と歌われている。「行く」という決意でない。「行きたい」、「歩いてみたい」、「ながめてみたい」という主観的希望が歌われているにすぎない。それも知らない、遠い街や海に行きたい、という。これを、新しき、未知なるものへの挑戦と解釈はできない。主体的で挑戦的な若者ではない。自分では決断できない若者、どこか遠くにいきたいのだが、一人ぼっちでどこにも行けない若者、二項対立で態度を決めかねている若者である。『潮来笠』の伊太郎のように、薄情そうで、風の吹くまま、行き先も決めないで、知らない遠くの西東を旅するような若者である。大人が「薄情そう」と非難しても、この若者像は若者にとり、時代に適合し、感性に合った格好いい生き方なのである。「歩こう」は格好いいのである。だからこそ、この歌も若者に受け入れられたのである。

団塊世代の特徴とこの歌の適合性をみてみよう。『上を向いて歩こう』で歌われている主人公は、田舎から都会に出て働きながら、一人暮らしをしている若者である。⑦の特徴「田舎から大都市への集住世代」に適合する。若者は、上を目指し、アメリカン・ドリームという幸せを実現するために働いている。③の特徴「アメリカン・ドリームをみる世代」という特徴に適合する。だが幸せは、雲の上にあり、届かない存在である。悲しい、淋しい、涙が止まらない。故郷の春の日や、夏秋の日を思い出してしまう。故郷では、一人ではなかった。物はなかったがだが、幸せだった。悲しみは、アメリカン・ドリームのかげに追いやろう。ひとりぼっちの夜、悲しくて涙が止まらないが、上を向いて歩こう。「歩こう」という決断と悲しみを、軽やかに歌いあげている。このようにこの歌にも、団塊世代の基本的特徴である①「二項対立の価値観」が歌われている。それも脱日本語で、軽やかに、感性に適合した二項対立である。「一人ぼっちの夜」と「思い出す 春・夏・秋の日」、つまり都会と故郷、都会でのアメリカン・ドリームがもたらす、雲の上のような幸せと、故郷の一人でない本当の幸せという対立が読みとれる。故郷の、一人でな

い、本当の幸せな生活に戻りたいのだからできない。アメリカン・ドリームを実現するためには、悲しいが後戻りできない。上をむいて歩くしかない。歩こう。『潮来笠』にも通じる、二項対立の矛盾、戻れない悲しみを、軽やかに歌いあげているところに、団塊世代の特徴との合致点があり、それを坂本九が「上を向いて歩こう」と、脱日本語の歌い回しで歌ったので、ヒットしたのである。

(3) 『いつでも夢を』は60年代青春演歌を決定づけた

この歌が、橋幸夫と吉永小百合のデュエットで歌われていることから解説していく。デュエットは、男女「二人」の間柄、「二人」という意識を歌うためにとられた形式である。この歌では、1962（昭和37）年の北原謙二の『若いふたり』で歌われているような、「君」と「僕」との「若いふたり」が、意識されている。だが1949（昭和24）年の『青い山脈』で歌われている若い「われら」、あるいは「ぼくら」「みんな」という集団のなかの、「君」と「僕」ではない。戦前から受け継がれた集団主義のなかでの「君」と「僕」ではない。プレ団塊世代の石原裕次郎が、「俺は待ってるぜ」と歌うような、「君」を考慮しない、一方的な・勝手な「僕」でもない。石原裕次郎が歌う「君」は、「あの娘」と表現され、無口で、従順な、思っていることもいえない女性のイメージを押しつけられている。石原裕次郎は、1962（昭和37）年の『赤いハンカチ』で、アカシアの花の下で、そっと臉をふき、恨みを抑えている女性を「あの娘」と歌った。団塊世代を代表する歌謡曲の『若いふたり』では、相手を「君」と呼ぶ。そして、「君」には君の夢や歌、道があり、「僕」には僕の夢や歌、道があり、ふたりが夢や道を寄せ合えば、甘く楽しい生活が実現するだろう、「若いふたりの ことだもの」必ず実現すると、歌う。「ふたり」が対等に協力することで、幸せが実現することを歌っている。団塊世代の特徴⑥「二人の形成」であり、それが将来の友達夫婦、家庭内協力型夫婦につながる。このような対等で協力する二人という意識と関係を歌うのが、デュエットである。デュエットでは、男女が順番に、時に一緒に歌う。男女対等で、十分知り合い、協力する関係にあることが前提となる。そのデュエットで前年度大ヒットしたのが、石原裕次郎と牧村句子の『銀座の恋の物語』である。この歌は、若い二人の「心の底からしびれるような」、命をかけた真実の恋を、甘く切なく歌っている。この大人のデュエットの成功を、清純派女優のアイドルである吉永小百合と青春歌謡の旗手である橋幸夫のデュエットで、ヒットさせたのが、『いつでも夢を』である。

歌は、女性コーラスの「あーあー」から、荘厳に始まる。

第1節は、橋幸夫が、軽やかに、さわやかに、「星よりひそかに 雨よりやさしく あの娘はいつも 歌ってる」と歌うことから始まる。「あの娘」が、空に輝く星よりやさしく、大地を潤してくれる雨よりひそかに、いつも歌をうたっている人だという。その彼女の歌が、悲しい心に

しみこんでくる、と歌う。次に男女二人の合唱で、「言っているいる お持ちなさいな いつでも夢を いつでも夢を」と続く。まるで女神のようなあの娘が、いつでも夢を持ちなさいと言っている。

第2節は、吉永小百合が、透き通った、絹のような歌声で、「歩いて歩いて 悲しい夜更けも」と歌う。あの娘の歌は、懐かしさを感じさせ、悲しみを和らげてくれる、と歌う。次に男女が一緒に、また「言っているいる お持ちなさいな いつでも夢を いつでも夢を」と歌う。悲しい夜更けでも、あの娘の歌を聴けば、悲しい状況でも歩き抜けると、歌う。

最後の節はまた合唱で、「言っているいる お持ちなさいな いつでも夢を いつでも夢を」から始まる。次に、あの娘は、歌声で、悲しみをうれしさに変える、と歌う。そして、女性コーラスで、「あの娘はかえる 歌声で」と確認して終わる。

この歌は、デュエットの形式を借りているが、対等な「君」と「僕」の関係を歌ったものではない。だがこの歌が、大衆に受け入れられ、レコード大賞を獲得した理由は2つある。第1が、あの娘の性格を、「星よりひそかに 雨よりやさしく」と歌ったことである。あの娘は、従順で、おとなしく、清純である。当時増大してきた男女平等関係での「君」ではない。一昔前の、控えめで、おとなしい女性である。だから大人からも広く受け入れられたのである。第2が、「お持ちなさいな いつでも夢を いつでも夢を」と、夢を持つことをストレートに肯定した点にある。それも悲しい時だからこそ、夢をもちなさいと、清純な娘がすすめる。そうすれば、悲しみをうれしさに変えられるという。あの娘の歌声は、その力があるという⁽⁴⁴⁾。

この歌は、当時の歌謡曲にも色濃く表れてきた団塊世代の7つの特徴に当てはまらない歌である。強いていえば、二項対立における「先祖返りの点」、アメリカ民主主義的な男女平等を肯定しても、心のどこかで日本の伝統的女性観の残滓が浮かびあがっている歌であるといえる。この歌は、古典的なコードである「清純な女性の優しさ」、「希望に向かって歩くことの大切さ」を歌っている。これらの青春歌謡の原点に戻ったからこそ、レコード大賞を受賞し、ここから青春歌謡が始まったのである。

(4) 『高校三年生』は個人主義の台頭、集団主義の没落（ぼくらの終わり）を決定づけた

歌は、弾むようなメロディーの後、女性コーラスで「あーあー」と歌われる。詰め襟の学生服姿の舟木一夫が歌いだす。

第1節は、「赤い夕陽が 校舎を染めて ニレの木陰に 弾む声」という、場面の説明から始まる。歌い出しは、金色の朝日ではない。高校生という幸せな時代の終わりを象徴する赤い夕陽である。終わるイメージから始まる。でも校舎のニレの木陰（多くの学校に植えられていた桜ではなく、ニレという外国ふうの印象を与える木である）では、生徒たちの弾む声が聞こえる。だ

がかれらは、「あーああああー 高校三年生」、もうすぐ卒業して、離ればなれにならなければならぬ高校三年生であることが説明される。次に「ぼ・く・ら」と高校三年生が集団・仲間であることを強調しながら、卒業後には「離ればなれになろうとも」、「クラス仲間は いつまでも」仲間でいようね、と続く。「ぼくら」という集団・連帯の時代は終わり、これから個人の時代が始まる境目の高校三年生を歌っている。三年生は、何かが終わることで、始まる年である。三年生を歌うこの歌は、人生の境目の記念の歌である。

第2節は、「ららららら ららららら うーうーう ららららら ららららら」と女性コーラスが学校の時を知らせる鐘の響きとともに歌い、高校のイメージを浮かびあがらせ、高校生姿の舟木が、「泣いた日もある怨んだことも 思いだすだろ なつかしく」と歌いだす。未来の自分が、今の高校三年生の時の恨みや悲しみを思い出してなつかしく思うだろう、と歌う。そして「あーああああー 高校三年生 ぼ・く・ら」と、現実に戻り、フォークダンスで彼女の手を握れば、「甘く匂うよ 黒髪が」と歌う。未来と過去、悲しく怨んだことと楽しかったことが相互に歌われ、高校三年生が、境目の時であることを強調する。

第3節は、女性コーラスが「あーあーあーあー」と歌った後、舟木が、「残り少ない日数を胸に 夢がはばたく 遠い空」と続ける。卒業まで残り少ない。ある者は大学に進学、ある者は就職する。1963（昭和38）年の高校進学率66.8%、大学・短期大学進学率20.9%である。進路は別々でも、夢は遠くに、未来に向けて大きくはばたく。「あーああああー 高校三年生 ぼ・く・ら」、進路が分かれても、「越えて歌おう この歌を」で終わる。将来の夢と希望を明るく歌い、再びの再会と連帯を、この歌をうたうことで実現しようという。

この歌が、現在でも団塊世代を中心に広く歌われている理由は、「あーああああー 高校三年生 ぼ・く・ら」「離ればなれ」あるいは「道はそれぞれ分かれても」と、「ぼくら」という集団主義・連帯主義が終わり、これからはバラバラな個人主義・個別主義が始まることを、明るく歌った点にある。この説は真実だろうか。

舟木一夫は、同年に学園もの歌謡を次々とヒットさせていく。『修学旅行』（60万枚）、『学園広場』（80万枚）、『仲間たち』（48万枚）である。これらの歌の共通点は、共同・連帯のイメージである。「ぼくら」、「仲間」、「肩くみあい」、「仲間たち」という歌詞が中心になっている。これらの歌の世界では、卒業まで存在する「ぼくらという連帯」の終わりを歌っている。だが現実の世界には、「ぼくら」や「仲間」という連帯は、高校生活のなかにもすでに成立していなかった。中学生活でも、非行、いじめ、不登校が問題になっていた。団塊世代は、その人数の大きさと、熾烈な競争をし、他をおとさなければ自分がすすめない世代であった。高校受験の時は、競争率が異常に高かった世代である。「ぼくら」が現実にはなかったからこそ、理想としての「ぼくら」を掲げ、そこから仲間の時代が終わったということを確認する必要がある。「ぼくら」

を、「ぼ・く・ら」と強調しなければならなかったのである。その確認の方法も、「離ればなれになろうとも クラス仲間は いつまでも」と、近い未来から遠い未来を観る視点、逆に「思い出すだろ なつかしく」と、未来の時点から過去を観る視点を使い分けなければならなかった。この時間差の移行が、「ぼくら」がない現在を曖昧にし、あたかも「ぼくら」があったように誤解させ、その集団主義の終焉と、これから始まる個人主義の出発を意識させるのである。虚構と複雑な時間差を利用して、かつての日本が色濃くもっていた「なつかしい共同性」を喚起させるのである。この歌は、120万枚を売り上げ、レコード大賞新人賞を受賞した。団塊世代の特徴①「二項対立の価値観」を色濃くあらわしている。すでに捨て去った集団主義を改めて遡上にあげ、未来から過去をみるように切り捨て、個人主義の台頭を確認する。だからこそ今でも心に残る思い出の歌の上位にはいっているのである。NHKの「BS あなたが選ぶ時代の歌 ベスト100」の第33位である。しかし存在しない「ぼくら」を歌い続けることはできなかった。舟木一夫は、学園もの歌謡から離れていく。

(5) 『君だけを』は「君」を発見し、「二人」への道をひらいた

第1節は、女性コーラスが、「ららららんら らんららんら」を2度繰り返し、雰囲気を作りあげた後、17歳の西郷輝彦が「いつでも いつでもー 君だけをー夢にみているー ぼくなんだ」と、一方的願望を甘く、切なく強調し、「君」というまことに曖昧な存在に呼びかけることから始まる。次に「あああ」と女性コーラスを伴いながら叙情たっぷりに「星の光を うつつして 黒い瞳に 出会うたびー」と歌い、「胸が震えーる ぼくなんだ」と、終わる。

第2節は「あああーあああーあああーあああー」という女性コーラスで始まり、「いつでも いつでもー 君だけが」、街角でぼくを待っているような気がすると、歌う。その理由が、「君のすてきな 黒い髪 雨に濡れてた 長い髪」にあると説明する。美人の象徴のひとつである黒い髪が雨に濡れて、さらにきれいになっているよ、待っていて欲しいな、という内容である。

第3節は第1節と同じ「ららららんら らんららんら」を2度繰り返し、再度気分を高揚させて、「いつでも いつでもー 君だけとー」夜の道を歩きたいという、とんでもない希望を歌う。当時、夜に2人で歩くことは、若い2人には許されなかったことである。夜の外出さえ、きびしく管理されていた時代である。さらに夢が続く。「ふたつ並んだ あの星も」君とぼくのように、「いつも仲良く ひかっている」、と歌う。

この歌の意義である「君の発見」の位置づけをしておこう。本稿で論じている「君」は、若者の「君」であり、大人の「君」ではない。1928（昭和3）年に流行し、1961（昭和36）年にリバイバルされた『君恋し』での「君」は、熟愛対象としての「君」、結婚相手としての「君」、成熟したおんなとしての「君」である。また、終戦直後に『青い山脈』で歌われた「われら」という

集団主義のなかの「君」でもない。石原裕次郎に代表されるプレ団塊世代が歌う、格好をつけて粋がる「俺」と、従順に従う「あの娘」や「女」としての「君」でもない。裕次郎の歌う「君」は、集団主義から離れているが、個と個つまり男と女、「君」と「僕」とが平等な関係で連帯していない。だから『錆びたナイフ』では、「俺」のことをきかない女性を一方的に「薄情な女」と歌う。人間関係が不確実な社会において、「君」と「僕」とを連結し、対等な「二人」の関係をつくるのは難しい。だから団塊世代は、まず『潮来笠』で、薄情そうな、態度を決めかねている若者を、軽やかに絶対肯定する必要があった。その上にたち『高校三年生』で、「ぼくら」というもはや存在しない集団主義に決別し、バラバラな個の個人主義に移行することを宣言した。そして『君だけを』で、バラバラな個が、新たに相手を「君」と呼ぶことで連帯を始めることを希望した。「君」を発見した。その「君」は、恋愛や結婚のプロセスに入らない十代の同級生を、初めて異性として意識しはじめるような頃の「君」である。当時の団塊世代の男の子の「僕」の心情を適切にあらわしている「君」である（少し思いこみが強くて、今ならストーカーとして捕まりそうな「僕」ではあるが）。「君」を発見しても、まだ連帯つまり「ふたり」は大変難しい。『君だけを』のように、胸が震えるほどの思いを、遠くから、ひそかに一方的に抱く以外にない。近づけないのは、心の星である「君」を、なくしたくないからである。『いつでも夢を』での「あの娘」という、遠くにいて、ひそかに、やさしくいつでも歌をうたっているような存在である。だがその歌での「君」は、「いつでも夢を」持ちなさいと歌ってくれている。そして『美しい十代』で、励まし合い、「話し合ったら つきない二人」という「幸福の花」の関係に進む。さらに『若いふたり』で、「君には君の 夢が—あり— 僕には僕の 夢がある—」と、それぞれの存在を対等に認めたいうで、「ふたりの夢を よせあえば」と、平等な関係、相思相愛の、連帯する「若いふたり」が歌われる¹⁵⁾。『君といつまでも』では、「僕は君といる時が一番幸せなのだ」と、永遠の変わらぬ「二人」の愛を歌う。『こんにちは赤ちゃん』では、結婚し、「二人だけの愛のしるし」が生まれ、幸せなニューファミリーを形成する「二人」を歌う。このように青春歌謡が展開される。団塊世代の特徴⑥平等な「友達夫婦」は、『君だけを』で、「君」を発見することで可能になったのである。

4 まとめ

団塊世代は、大人でも子供でもない若者という存在を広く認めさせた世代である。だから青春歌謡という新しいジャンルを開拓した。団塊世代のもつ特徴が、青春歌謡をつくり、かれらが歌う歌謡曲が、団塊世代の特性をつくりあげた。

団塊世代の特徴は7つある。第1の大きな特徴は、二項対立の価値観をもつ世代であるという

ことである。大人に属する項目である多数派，集団主義（ぼくら，われら），田舎，慣習，質素などを否定し，少数派，個人主義（僕，君，二人），都会，感性，消費，おしゃれなどを肯定し，自分たち若者の社会的コードとした。若者のコードを選ぶ価値基準は感性であった。格好いいからVANの洋服を着る。好きだから一緒にいた。気持ちいいから，歌を聴きうたった。感性に適合した消費をすることが，若者の自己表現になった。格好いい自分でいたいと思った。その感性に最も適合したのがアメリカン・スタイルであった。アメリカン・カジュアルの洋服を着，アメリカの中流家庭の電化製品をそろえようとした。アメリカン・ドリームをみた世代でもある。三種の神器，3Cを消費していった。また都会には，感性に合う夢があったから，都会に移り住んだ。感性に合う物，つまり二項対立において，少数派に属する若者のコードを選び取るための手段が，抵抗であった。大人世界に抵抗することで，若者の世界をつくりあげていった。だが，その抵抗そのものも感性にもとづいているから，子どもの頃に田舎で慣れ親しんできた慣習や集団主義を完全に捨てきれない。田舎での日々をなつかしく思い出してしまう。この点にも二項対立の矛盾を抱え込んでいる世代である。

このような団塊世代は，生まれた時から，それぞれの時代のなかで，いろいろな歌を聴き，うたってきた。

1歳の1948（昭和23）年，すでに豊かな国アメリカへの憧れが，『憧れのハワイ航路』でうたわれている。3歳の1950（昭和25）年，朝鮮戦争の特需景気にのり，洋ものの『ボタンとリボン』や『ビギン・ザ・ビギン』などのポピュラーソングが流行した。4歳の1951（昭和26）年，後に国民的歌手に成長する美空ひばり，当時13歳が，『私は街の子』などを歌い，ひばり旋風をまきおこす。6歳の1953（昭和28）年には，美空ひばりに江利チエミと雪村いずみ加わり，3人娘が人気を三分した。江利チエミと雪村いずみは，アメリカ讃歌の『テネシーワルツ』や『想いでワルツ』などを歌った。小学校に入学する前から，アメリカン・ドリームが，歌謡曲という形でも耳からも入っていたのである。

8歳の小学2年生の1955（昭和30）年，『別れの一本杉』では，神武景気の影響で，当時増えつつあった出稼ぎの悲しみが歌われた。9歳の小学3年生の1956（昭和31）年，石原裕次郎を象徴とするプレ団塊世代が，大人でもない子供でもない若者という社会的コードを主張し始める。兄や姉が口ずさむ『俺は待ってるぜ』や『錆びたナイフ』を，なにか格好いいなと聴いていた。集団就職列車が運行され，若者の都会への大量移動が本格化する。10歳で小学5年生の1958（昭和33）年，岩戸景気が始まる。大人は『有楽町で逢いましょう』という，甘いムード歌謡に酔いしれる。若者文化は，そのような大人に抵抗してロカビリーを流行させる。リーゼントで頭をかため，マンボ・ズボンで『ダイアナ』や『監獄ロック』などのリズムに乗り，踊り明かした。カミナリ族やイナズマ族がバイクを乗り回す。11歳の小学6年生の1959（昭和34）年，御成婚

の影響でテレビ普及率が急増し、テレビっ子問題がおきる。テレビがお茶の間に入り込み、映像でも歌謡曲が、子供に影響を及ぼしてくるようになった。レコード大賞の第1回大賞は『黒い花びら』である。アメリカのホームドラマ・テレビが次々と放映され、アメリカン・ドリームをかき立てていく。耳からも目からも、ますますアメリカに洗脳されていく。

12歳の中学1年生の1960(昭和35)年、安保闘争の混乱のあと、所得倍増計画が打ちだされ、高度成長は加速する。若者が、感性を解放し、アイビー・ルックを着られるほど、豊かになる。中学1年生という感受性の豊かな年齢の時、橋幸夫の『潮来笠』が、1960年代という新しい時代を切り開いた。この歌は、60年安保の混乱期、その後の高度成長への激変期にあって、二項対立のどちら側につくべきか態度を決めかねている若者たちにたいして、「薄情そう」と揶揄されようとも、気ままに、感性を価値基準として生きていけばよいことを認めた歌であった。「それっええでー いいのおおさー」と若者の態度を、軽やかに全面肯定したのである。13歳の中学2年生の1961(昭和36)年、大人はレコード大賞の『君恋し』や『銀座の恋の物語』の甘いムードに酔いしれている。貧しく、働かなければならない多くの若者は、『上を向いて歩こう』で、アメリカン・ドリームのむなしさ、都市生活のさびしさや悲しみを、坂本九が脱日本語化された発音とリズムで、からっと歌ったことに、元気づけられた。団塊世代の特徴であるアメリカン・ドリームを実現するために、田舎を捨てざる悲しみ、二項対立の矛盾が歌われていたのである。14歳で中学3年生の1962(昭和37)年、『いつでも夢を』がレコード大賞を受賞し、青春歌謡ブームが始まる。しとやかで、清純な「あの娘」が、「いつでも夢を」もつことの大切さを歌うことで、青春歌謡を社会に公認させたのである。若者の青春が、大人にも公認されだしたのである。

15歳の高校1年生の1963(昭和38)年、レコード大賞は『こんにちは赤ちゃん』である。この歌のなかでは、「君」と「僕」とは、「ふたりだけの愛のしるし」である赤ちゃんをもうけ、ニューファミリーを形成している。団塊世代の若者は、『若い二人』で歌われているような、「君」と「僕」とを対等に認めたうえで、「ふたり」の夢や道をよせあう相思相愛の関係もつくりたい、とうたう。このような究極の「二人」の関係を築く前に若者は、多くの段階を踏まねばならない。まず大人の伝統的な「われら」の関係からの決別をしなければならない。新人賞を受賞した『高校三年生』が、その決別を宣言した。若者が「ぼくら」という集団主義の関係から決別し、離ればなれの個としての「君」と「僕」という個人主義の関係になったことを、改めて宣言した歌である。だが団塊世代にとり、集団主義から個人主義への移行は簡単でなかった。『美しい十代』で歌われるような、ノートを貸しあい、話しあい、励ましあう関係の「君」と「僕」との「二人」がつくられ、歌われる必要があった。そのような「君」と「僕」との関係をつくる前に、「君」を発見しなければならなかった。16歳の高校2年生の1964(昭和39)年、『君だけを』で、「君」

が発見された。この歌で歌われる「君」は、「僕」が遠くから一方的に見つめるだけの対象である。当時の若者関係における、一般的・始源的「君」であった。『平凡パンチ』が創刊され、このような関係にある「君」と「僕」の若者の心情と行動の後押しをする。18歳の大学1年生あるいは社会人1年生の1966（昭和41）年、いざなぎ景気が始まる年、『君といつまでも』で、「君」と「僕」との関係が離れない永遠の仲になる幸せが、歌われる。

団塊世代の特徴が、歌謡曲により形成されてくる道筋を、さらに簡単に示すと、以下のようになる。

1940年代から団塊世代の特徴が育成される。→1950年代後半、プレ団塊世代が若者の社会的コード確立の先鞭をつける。→『潮来笠』が、1960年代の若者の心情と行動を絶対肯定する。→『高校三年生』が、「われら」との決別と、バラバラな「君」と「僕」との出発を宣言する。→『君だけを』が、「君」を発見する。→『いつでも夢を』が少し古いタイプのひそかにやさしい「君」を歌い、青春を公認させる。→『美しい十代』が、話しあい、励ましあう、「君」と「僕」との「ふたり」を歌う。→『若い二人』が、「君」と「僕」の夢と道を、平等によせあう「二人」を歌う。→『君といつまでも』が、「君」と「僕」との変わらない、永遠の愛を歌う。→『こんにちは赤ちゃん』が、「ふたりだけの愛のしるし」とニューファミリーの幸せを歌う。

このように団塊世代の特徴は、御三家といわれた橋幸夫の『潮来笠』、舟木一夫の『高校三年生』、西郷輝彦の『君だけを』を中軸としてつくりあげられた、といえる。逆に、この3曲が、団塊世代の特徴の影響からつくられた、ともいえるのである。団塊世代は今でも御三家が好きである。御三家メモリアル・コンサートが、1999（平成11）10月から2001（平成13）年12月まで、全国120ヵ所で開催され、多くの団塊世代が会場を訪れ、拍手喝采をした。御三家の歌が、団塊世代の特徴をつくり、団塊世代が御三家の歌をうたわせた。歌が世と人をつくり、世と人が歌をつくる。

《注》

- (1) 参照、岩間夏樹、戦後若者文化の光芒、35-37頁、三浦展、団塊世代を総括する、12-13頁。
- (2) プレ団塊世代の文化が、団塊世代の文化や歌謡曲に大きな影響を及ぼしたので、解説しておこう。プレ団塊世代の象徴が石原裕次郎である。1956（昭和31）年『狂った果実』で俳優としても歌手としてもデビューし、翌年大ブレイクした。その年に『俺は待ってるぜ』と『錆びたナイフ』の映画と主題歌が大ヒットしたのである。1958（昭和33）年には、『嵐を呼ぶ男』で、不良＝太陽族のイメージを払拭する「正義の味方」路線に転向し、大スターの道を歩み始める。理想の男性としてタフガイの石原裕次郎といわれた。少し遅れてデビューした小林旭は、マイトガイと呼ばれ、人気を争った。1958（昭和33）年にロカビリー・ブームをひきおこしたのも、プレ団塊世代である。ロックとヒルビリー（田舎の音楽）をミックスさせた音楽である。1958（昭和33）年の平尾昌章の『星はなんでも知っている』、同年の小坂一也の『監獄ロック』、山下敬二郎の『ダイアナ』、ミッキー・カーチスの『オオキャロル！』などが代表的な歌である。ロカビリーのビートは日本のポップスに大きな影響

を与えていく。

- (3) 1960年代に入るとロカビリー・ブームが下火になり、代わってジャズが流行した。大人の世界からすると、ウエスタン・カーニバルもジャズ喫茶も不良の集まる場所であり、許せない音楽を聞かせる場所であった。他方でこの頃、新宿を中心として「うたごえ喫茶」がはやっていた。アコーディオンに合わせて、ガリ版刷りの「歌の手帳」に書かれた歌を合唱した。ロシア民謡や『もずが枯れ木で』などの愛唱歌、仲宗根美樹の『川は流れる』、リバイバルの『北上夜曲』などが歌われた。大人公認・推奨の場所である。正反対の場所に、同一の若者が通うことは、当時何ら不思議ではなかった。「キャーキャー」わめき声が聞こえるウエスタン・カーニバルや薄暗いジャズ喫茶店に、落下傘スタイル、マンボ・スタイルで通っている若者が、翌週には地味なワンピース姿や学生服で、明るいうたごえ喫茶でロシア民謡や『北帰行』を歌っていた(参照、アクロス編集室、ストリートファッション, 59頁)。
- (4) 参照, 岩間夏樹, 戦後若者文化の光芒, 57-60頁。
- (5) 参照, 三浦展, 団塊世代を総括する, 21-23頁。
- (6) 参照, 岩間夏樹, 戦後若者文化の光芒, 45-46頁。
- (7) 参照, 岩間夏樹, 戦後若者文化の光芒, 52-57頁。
- (8) 参照, 古志田信男, 島田芳文, 矢沢寛, 横沢千秋編, 新版 日本流行歌史 下, 11-14頁, 佐藤嘉昭, 若者文化史, 49頁。
- (9) 参照, 岩間夏樹, 戦後若者文化の光芒, 47-52頁, 三浦展, 団塊世代を総括する, 21-23頁, 91-95頁。
- (10) 参照, 三浦展, 団塊世代を総括する, 26-31頁, 国勢調査。
- (11) 参照, NHK 世論調査部編, 現代日本人の意識構造 [第三版], 49頁, 袖川芳之, 花島ゆかり, 森村昌弘編, 平成大家族, 104-116頁。
- (12) 参照, 岩間夏樹, 戦後若者文化の光芒, 40-42頁, 三浦展, 団塊世代を総括する, 23-26頁, 有沢広巳監修, 昭和経済史, 407頁, 国勢調査。
- (13) 参照, 村瀬学, なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか, 94-116頁。
- (14) そうすると清純でおとなしそうな, 歌ばかりうたっているあの娘に, 古来の大地の母, 卑弥呼のようなシャーマン, ユングのいう太母のイメージがついてくる。このことは, 吉永小百合が、『文藝春秋』2001年1月号(第79巻1号)「20世紀の美女ベスト50 読者アンケート」において, 240票を獲得し第1位であったことを考慮すると, 理解できる。原節子が207票で2位, オードリー・ヘップバーンが127票で3位である。雑誌『文藝春秋』の読者には, 団塊世代前後の人が多く, 吉永小百合が団塊世代の若い頃の憧れの存在で, それが今でも続いていることが分かる。
- (15) この頃の「二人」を歌う曲は, 1964(昭和39)年の『二人の星をさがそうよ』, 1965(昭和40)年の『二人の世界』である。「二人」が意識されて, デュエットが始まる。最初は, 1961(昭和36)年の石原裕次郎と牧村旬子の『銀座の恋の物語』のような大人のムードの歌謡曲であった。公称300万枚の大ヒットである。それが若者のデュエットに代わってくる。1962(昭和37)年の『いつでも夢を』, 1962(昭和37)年の『いつもの小道で』, 1963(昭和38)年の『若い東京の屋根の下』, 1963(昭和38)年の『星空に両手を』, 1966(昭和41)年の『二人の銀座』である。1960年代は「君」の発見で盛り上がった時代である。さらに「君」は, フォークソングで拡大・発展する。第1次フォークソング・ブームの時は, 1962(昭和37)年のザ・ブロード・サイド・フォーの『若者たち』のように, 「果てしなく遠い」道を, 歯を食いしばりながら歩き続ける, 挑戦的な「君」が歌われた。第2次フォークソング・ブームの時は, 1972(昭和47)年の吉田拓郎の『旅の宿』で歌われているような「薄の簪」をさし, 「みょうに色っぽい」「浴衣のきみ」である。身勝手に片思いの, すれ違いの2人の関係の「君」となる。それ以後「君」は, ニューミュージックの分野で多様な意味をもちながら, 歌い継がれていく。